

N21b B型輝線星プレオネ(28 Tau)の新活動期における測光・分光観測

田中謙一、定金晃三(大阪教育大学)、鳴沢真也(西はりま天文台)

プレアデス星団に存在するB型輝線星プレオネ(28 Tau)は、測光・分光観測の結果から約35年の周期で活動することが分かっており、実視連星+分光連星の3重連星でもあることが知られている。昨年、西はりま天文台や美星天文台での分光観測から、新たな活動を示すバロメーターとなるCa II K線の吸収が深くなっていること・バルマー線におけるダブルピーク輝線の中央の吸収が深くなっている(shell-phaseを示す)ことが示され、プレオネに二つの円盤が存在することが分かり、2006年春季年会(N14c)において発表された。前回の活動時(1972年)ではB等級で0.5等~0.6等急激に暗くなっており、H α のプロファイルはshell-componentが発達していく様子が観測でとらえられている。本発表では、大阪教育大学の51cm反射望遠鏡での測光観測と、西はりま天文台の2m反射望遠鏡「なゆた」に取り付けられた可視光分光器による分光観測の二つの観測に加えて、2001,2002年に岡山天体物理観測所91cm反射望遠鏡で観測された分光観測データ等の過去のデータアーカイブも用い、プレオネの本体・新旧ディスクの活動を分析し新活動期においてどのような変化が起こっているかを報告する。